

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 6 NO. 3

昭和54年 8月30日 発行

編集・発行人 市原 正夫

〒 260

千葉市中央港 1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



児島善三郎「燈台」

観潮台

地域主義

関東甲信越静地区の文化振興会議が、文化庁と新潟県教育委員会共催で七月二六・二七日に新潟市で開催された。五部会に分かれたうちの、私は芸術文化部会（美術）に参加し基本的課題を自覚した。

公立美術館での資料収集の在り方で、いわゆる地域主義の問題が出た。公立美術館として地域性を第一にした資料の整備は、地域の支えと期待で存立する以上当然である。こうした公立美術館としての資料の充実は、美術を核にした地域の歴史と文化の再発見と、美術の振興の基礎になる重要な営みである。

しかし、反省的かというと、私にはこの地域性の判断基準が意外に観念的に思える。例えば、作家の親が地域での生まれとか、作家が幼時に居住したなどと、ゆかりの人として作品を集めている。問題はここにある。私はあくまでも作家の自己形成空間が地域に密着しているか、作品の発想形成空間として地域が求められるかどうか、要するに、私は地域に根ざした原風景の所産であることが重要な基準だと文化振興会議でひそかに確認した。

（高橋在久）

—いよいよ九月十四日より開催—

特別展 『房総を訪れた巨匠たち』

—十二作家五十七点を一堂に—

明治以降、洋画の発展と相まって、房総の地にも多くの美術家が訪れ、当地をモチーフとした作品を残している。

それは、房総が首都東京に隣接し、温暖な気候と変化に富んだ景観によるものである。

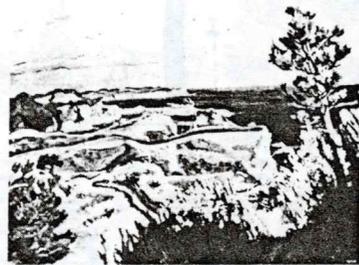
彼らの大半は、房総を単に写生地としてとらえ訪れているが、それでも、房総の風土に触発されて、制作された作品が作家自身にとっても、その画風においても、重要な一時期を示す結果をもたらせたものもある。そして、さらにこの中には、美術史上に名を残す巨匠たちも認められ軽視することのできない問題点を含んでいる。また、房総を訪れることにより、自己の画風等に変化をもたらしたというのではなく、房総の地に多大な業績を残した美術家も認められる。

この展覧会では、房総を訪れた巨匠を取り上げ、それらの人々が房総という地からどのような影響を受けたか、あ

るいは房総にどのような業績を残したかを、各々の芸術の成果をたどりながら問題提起し、同時に美術史の流れの中での房総を考えてみたい。

①房総を訪れ作風に変化をもたらした作家

代表的な人として、安井曾太郎（明治二十一年—昭和三〇年）があげられよう。安井は京都に生まれ、聖護院洋画研究所にて浅井忠に師事した。滞欧後、安井の作風は、セザンヌ的な色彩と造形とをとり入れた重厚なものであったが、その後、形体や色彩を単純化して、紫色を加えて行くなどの変化をもたらした。『座像』（昭和四年）においては、生き生きとしたタッチと、白色を加えたダイナミックな画面になった。このような作風は昭和六年（一九三一）外房太海で『外房風景』（大原美術館蔵）を描くことにより、『座像』では描かれなかった光が



安井曾太郎「鶴原風景」

加えられ、明るく意欲的な変化がみられるに至った。『外房風景』での変化は、安井がそれまで積み重ねてきた上によるものであることは間違いないが、画面に光が加えられたことは、外房の明るく雄大な景観に接したことがひとつの機縁となったと考えることができるのではなからうか。その風土の影響力は、あまりにも微力ではあるが、作風の変化をもたらすべき時期に、房総を訪れ、その風土に接したことは、偶然とは言え見逃すことができないうように思われる。

れる。

同様のことは、坂本繁二郎（明治十五年—昭和四四年）にも認められることができる。坂本は久留米市に生まれ、小山正太郎の不同舎や明治美術会を継続した太平洋画会で学んだ。その頃の坂本の作風は、精密ではあるが平板な光の輝きのないものであった。しかし、明治四五年（一九一二）二度目として房総を訪れた時を界として、あざやかな色彩の中に光が生き生きと表現されるようになった。その代表的な作品としては、『うすれ日』『魚を持ってきた海女』（ブリチストン美術館蔵）、『海岸の牛』や今回展示する『人参畑』などがある。



坂本繁二郎「人参畑」

このように、安井と坂本には、房総を訪れた時期の作風

に共通して、光が加えられている。明るく輝く房総の光が描かれたと考えることはできないであろうか。

青木繁（明治十五年—明治四四年）・中村彝（明治二〇年—大正一三年）は、少し様子はことなるが、大きく見てこの分類に含むことができるように思われる。

青木は、明治十五年（一八八二）に久留米市で生まれ、坂本と同様に不同舎で学び、東京美術学校にも入学している。明治三七年（一九〇四）坂本・森田恒友・福田たねと共に訪れた時に、『海の幸』（ブリチストン美術館蔵）を描いたことは有名であるが、それ以外にも翌年の再訪時のものと合わせて数点の海の作品を残している。この時期の青木は、彼の生涯を通じて、もっとも充実した時期であったと言え、明るくダイナミックに描かれている。画家正宗得三郎は、「この新鮮で潑刺たる画面はおのずから波動して自然の一角を捕えている」と賛している。青木の精神的な充実と、外気のすがすがしさが結合した結果によるものではなからうか。

中村彝は、水戸市に生まれた。房総へは、明治三八年（一九〇五）に療養のため訪れたのが最初であるが、その後数回の転地療養のあと、明治四二年（一九〇九）とその翌年、本格的に作画のため来ている。前回では、太平洋画会の色調と言えらるべき色彩の輝きを殺した重厚な脂っ

原風景を視点に

房総の地が日本近代洋画史のなかで、写生地として脚光を浴びたのは明治十一年である。近代洋画史の先駆の巨匠である浅井忠の、二十二歳の年の『印旛沼』のスケッチが証明し、現在本館に収蔵されていて、原風景としての房総の始源を考へさせる。

特別展「房総を訪れた巨匠たち」は、これまでや、超歴史的に鑑賞された作品を、さらに、その作家を歴史的な存在として見なおすことを念願し、ひとつの視点として原風景を加えることをすすめた。

近代洋画史のなかの巨匠

ばい『嶺』（宮内庁蔵）を描いているが、今回出品する作品で次回に制作された『海辺の村』（東京国立博物館蔵）は、重厚な中にも色彩の輝きと光が描き上げられている。これは中村の充実した精神と、印象派の傾向を表現している。青木と同様の結果とみる事ができるのではなからうか。



中村彝「海辺の村」

高橋 在久

私たちは、意外なほど房総の風土に立ち、交感し感動を増大させ主題に選び、さまざまな心象を画布に託してきた。房州に滞在し流転を確信した中村彝の『海辺の村』や、藤島武二が晩年に銚子を訪ねて描いた『犬吠崎の灯台』など、今回の展示作品からいえる。

こうした、作品の発想形成空間や作家の生活形成空間を分析し、歴史的に作品に接近し理解を深める原風景の追究は、極めて重要な近代洋画史への視点のひとつである。もちろん、作品の造形性を無視することではなく、また、房総での制

作や生活に限定した問題でもない。

先年、高橋義孝氏が『思想』昭和五十三年一月月号、岩波書店刊）で、「原風景と原風景」を論じたが、そこで「原風景の精緻な分析は、芸術・文学の一つの新しい研究主題であり、有望な未来の期待できる研究主題だ」とまでいわれたように、基本的な近代洋画史への接近と理解の一方法である。

すでに好例として、読売新聞日曜版に連載中の田中穰氏の「日本の四季」は、実感的な原風景の追究が可能なことを証明し美術史を拡大している。さらに、文

②房総に何らかの影響を与えた作家

この中には、昨年度、企画展で紹介した堀江正章をはじめとし、椿貞雄などが上げられよう。彼らは、教育者として多くの逸材を育てるなど、その影響力は強い。しかし、

学でも数年前から奥野健男氏が『文学における原風景』（昭和四十七年・集英社刊）で、先駆的に文学への理解の在り方を示し影響を与えている。

とにかく、房総の太平洋沿岸の海辺には、変化に富む絵のために自然が造型したようなりアス式海岸の景觀と、作家たちの心情と合致し造型意志を増大させた風景が連続し、当然のように風景と交感の結晶が近代洋画史を飾っている。従って「房総を訪れた巨匠たち」展を機会に、原風景を視点に加えた近代洋画史への接近と、その中に位置する房総の再発見を重ねてすすめる、視野の展開を期待したい。

結果的には、定住しているため、「訪れた」ことには間違いないが、厳密な意味から除外するべきであろう。

今回の出品作家の中では、山本鼎（明治一五年・昭和二年）が代表される。

山本は岡崎市に生まれた。十才の時より木口木版を習得し、東京美術学校に入学して黒田清輝に学んだ。房総を描いた作品については特筆すべきものはないが、浦安の海師を画いた木口木版『漁夫』と数点の版画や今回展示する水彩画『御宿風景』が現存する。これらの作品からは、房総からの影響を見出すことはできない。彼の房総への影響は、彼が生涯力をそそいだ児童自由画教育と農民美術運動である。時に前者は、大正一〇年北条（現在の館山市）において自由画展が開かれたのを始めとして、千葉師範学校附属小学校でも開催され、この時山本自身が講演を行うなど、当時全国でも先駆的活動を行い注目されていた。自由画教育とは、児童が従来の臨本（教科書）をそっくり模写するといったのではなく、自分の眼でみた対象物を自分が感じるままに描くことを第一義とした

ものである。これは、全国に拡まって行ったが、房総の果たした役割は重要なものであった。一方、後者の農民美術運動は、農閑期に農民が工芸品を作り、それを売り副収入を得ようとするものであったが、房総では、昭和八年の段階で千葉県農民生産組合が組織されたのを始め、香取・鴨川・勝浦でも組織されており、積極的な活動の様子を知ることができる。

この二つの運動は、房総に限ったことではないが、特に自由画の影響は強く、山本との係り合いを見逃すことではできないであろう。

③房総を愛した作家

房総を愛した作家は多い。その中でも、今回とりあげた金山平三（明治一六年―昭和三九年）・林俊衛（明治二八年―昭和二〇年）などが、代表的人物と思われる。

金山は神戸市に生まれ、東京美術学校で黒田清輝に学んだ。諏訪を愛し、よく作画に出かけ、多くの名作を描いているが、同時に、房総にも生涯を通じて度々訪れている。その回数も二十回近くに及び、今



金山平三「風雨の翌日」

回出品する『風雨の翌日』（東京芸術大学蔵）は、昭和八年（一九三三）千倉で描かれたものであり、彼の代表作の一つともなっている。

林は上田市に生まれ、特に師事した人もいないが、大杉栄を描いた『出獄の日の〇氏』が徹回命令を受けたことにより名を高めた。たびたび房総を訪れているが、晩年市川で居を構えたり、鶴原や御宿に長期滞在し盛んに作画しており、房総をこよなく愛したことを知ることができる。これは、アルコール中毒気味であった林が、都会の雑騒と酒を飲む機会から逃れるためであったと言われるが、それと同

時に「少年時代から、たったひとりで刻々と変化する自然にみとれ、われを忘れ、学校へいくことを忘れて行んでいたように、四十歳を越えた俊衛であったが、ひろびろとした海の青や緑や藍色に変化する景色をながめていると、もう何も考えられなくなっていくのだった」と小崎軍司氏はその著『林俊衛』において指摘されている。林は、房総において生涯最も佳作を多く描いた時期であった。



林俊衛「鶴原の海」

今回の展覧会には、以上の外、藤島武二・小杉未醒・牧野虎雄・大久保作次郎・児島善三郎の作品を加え、洋画五七点を展示する。

会期・入場料等

●会期
9月14日(金)〜10月18日(木)
開館時間は、午前9時〜午後4時30分
休館日 月曜(ただし、9月24日は開館し、翌日休館)
●入場料
大人三〇〇円(二〇〇円)
大・高生二〇〇円(一〇〇円)
中・小生一〇〇円(五〇円)
○内は二〇名以上の団体料金

美術を語る会

展覧会について、「語り合」の中から、作家や作品についての知識や理解を深めるために開催します。
話題 原風景としての房総
話題提供者 高橋在久(本館副館長)

講演会

特別展に伴い美術講演会を次のとおり開催します。

日時 9月29日(土) 午後2時より
会場 千葉県立美術館

筑波日記を刊行

浅井 忠像建立委員会の御

筑波日記

高配により、浅井の青年時代の紀行文である「筑波日記」を復刻刊行した。
この日記は、東京から郷

里の佐倉を経て、銚子を巡り、筑波山に登った十日間の行程を軽いタッチと達筆な文章で痛快に記している。明治十年代の見聞した地域の景観や風俗・習慣をも知ることができ。なお、多くの人々の便宜をはかるため試読と解説を加えた。
浅井忠の人と芸術の背景を知るうえで的好資料となることを望んでいる。

中村彝は、水戸市に生まれた。房総へは、明治三八年（一九〇五）に療養のため訪れたのが最初であるが、その後数回の転地療養のあと、明治四二年（一九〇九）とその翌年、本格的に作画のため来ている。前回は、太平洋画会の色調と言えらるべき色彩の輝きを殺した重厚な脂っ

ばい「嶺」（宮内庁蔵）を描いているが、今回出品する作品で次回に制作された『海辺の村』（東京国立博物館蔵）では、重厚な中にも色彩の輝きと光が描き上げられている。これは中村の充実した精神と、印象派の傾向を表現している。青木と同様の結果とみることでできるのではなからうか。



中村彝「海辺の村」

原風景を視点に

房総の地が日本近代洋画史のなかで、写生地として脚光を浴びたのは明治十一年である。近代洋画史の先駆的巨匠である浅井忠の、二十二歳の年の『印旛沼』のスケッチが証明し、現在本館に収蔵されていて、原風景としての房総の始源を考えさせる。

特別展「房総を訪れた巨匠たち」は、これまでや、超歴史的に鑑賞された作品を、さらに、その作家を歴史的な存在として見なおすことを念願し、ひとつの視点として原風景を加えることをすすめたい。

近代洋画史のなかの巨匠

高橋 在久

作や生活に限定した問題でもない。

私たちは、意外なほど房総の風土に立ち、交感し、感動を増大させ主題を選び、さまざまな心象を画布に託してきた。房州に滞在し流転を確信した中村彝の『海辺の村』や、藤島武二が晩年に銚子を訪ねて描いた『犬吠崎の灯台』など、今回の展示作品からいえる。

こうした、作品の発想形成空間や作家の生活形成空間を分析し、歴史的に作品に接近し理解を深める原風景の追究は、極めて重要な近代洋画史への視点のひとつである。もちろん、作品の造形性を無視することではなく、また、房総での制

作や生活に限定した問題でもない。

先年、高橋義孝氏が「思想」昭和五十三年一月月号、岩波書店刊で「原風景と原風景」を論じたが、そこで「原風景の精緻な分析は、芸術・文学の一つの新しい研究主題であり、有望な未来の期待できる研究主題だ」とまでいわれたように、基本的な近代洋画史への接近と理解の一方法である。

すでに好例として、読売新聞日曜版に連載中の田中穰氏の「日本の四季」は、実感的な原風景の追究が可能なことを証明し美術史を拡大している。さらに、文

②房総に何らかの影響を与えた作家

この中には、昨年度、企画展で紹介した堀江正章をはじめとし、椿真雄などが上げられよう。彼らは、教育者として多くの逸材を育てるなど、その影響力は強い。しかし、

学でも数年前から奥野健男氏が『文学における原風景』（昭和四十七年・集英社刊）で、先駆的に文学への理解の在り方を示し影響を与えている。

とにかく、房総の太平洋沿岸の海辺には、変化に富む絵のために自然が造型したようになりアス式海岸の景觀と、作家たちの心情と合致し造型意志を増大させた風景が連続し、当然のように風景との交感の結晶が近代洋画史を飾っている。従って「房総を訪れた巨匠たち」展を機会に、原風景を視点に加えた近代洋画史への接近と、その中に位置する房総の再発見を重ねてすすめる、視野の展開を期待したい。

結果的には、定住しているため、「訪れた」ことには間違いないが、厳密な意味から除外するべきであろう。

今回の出品作家の中では、山本鼎（明治一五年一昭和二一年）が代表される。

山本は岡崎市に生まれた。十才の時より木口木版を習得し、東京美術学校に入学して黒田清輝に学んだ。房総を描いた作品については特筆すべきものはないが、浦安の漁師を描いた木口木版『漁夫』と数点の版画や今回展示する水彩画『御宿風景』が現存する。これらの作品からは、房総からの影響を見出すことはできない。彼の房総への影響は、彼が生涯力をそそいだ児童自由画教育と農民美術運動である。時に前者は、大正一〇年北条（現在の館山市）において自由画展が開かれたのを始めとして、千葉師範学校附属小学校でも開催され、この時山本自身が講演を行うなど、当時全国でも先駆的活動を行い注目されていた。自由画教育とは、児童が従来の臨本（教科書）をそっくり模写するというのではなく、自分の眼でみた対象物を自分が感じるままに描くことを第一義とした

収蔵品紹介

大久保作次郎作「丘上の鐘楼」

鴨川市太海は、県指定名勝の仁右衛門島等、自然の風光美に富み、恰好の写生地として、これまで多くの画家が訪れてきたところである。この大久保作次郎も、しばしば太海に足を運んだ画家の一人であった。当地の旅館である江澤館に残されている大正後期から昭和初期にかけての古い宿帳にも彼の名が記されている。制作も精力的に行なっており、中でも昭和五年作の「波太の漁家」、「外房の漁村」等は、太海での成果としてよく知られている作品である。



大久保作次郎「丘上の鐘楼」

この「丘上の鐘楼」も、やはり当地にモチーフを求めた作品であって、制作時期は明らかではないが、恐らく前記の作品と同じ頃のものと思われる。青空が広がり、木々の

葉は光に包まれ、明るく輝いている。後景の鐘楼も光と影の効果により、その存在を明確にし、また大地は暖かな土の香りをたたえている。

彼は、明治二十三年大阪市に生まれ、東京美術学校西洋画本科・同校研究科で学んだ。明治四十四年の第五回文展に初入選以来、本格的に創作活動を行なったが、昭和四十八年に没するまで、常に身近な題材に愛情を注ぎ、情感の溢れた作品を生み出した。そしてその多くは、明るい光と暖かさに満ちた外光派の穏健な作風によつていた。

昭和二年、第八回帝展審査員となり、また昭和十三年創立の槐樹社に同十六年まで会長として在籍。昭和十四年には創元会を結成し、作品を発表した。戦後は、主に日展を舞台に活躍し、審査員、参事、評議員等を歴任した。他に、新世紀美術協会を結成している。昭和三十四年に日本芸術院賞を受賞、同三十八年には日本芸術院会員に就任した。

美の泉

表現の特色

山水画・風景画

絵画にとつて「いかに描くか」ということは重要なことですが、また、同時に「何を描くか」ということも非常に大切な問題です。

この頃のように、日本画が表現の姿を大きく変えるまでは、題材によつて「人物・山水・花鳥」の三分に分けられ、それぞれの分野で伝統的な把え方がなされてきました。

もともと、山水画（風景画）は、宗教画や人物画の背景としてあつた自然の独立から始まったものです。この自然物や風景が独立した山水画（風景画）として一般に描かれるようになったのは、西洋では東洋に比べてずっと後のことです。東洋、特に中国に於ては七・八世紀頃には独立した絵画の世界を創っているのに対して、西洋では、十七世紀頃からとみられていきます。日本においても中国の影響は早くから現われてい



浦上玉堂「穿幽透深」

ますが、十四世紀・室町時代には、山水画から更に花鳥画が独立し、「人物・山水・花鳥」の三大潮流の世界を創り上げています。それだけ、東洋人の生活が早くから自然と結びついて、自然に対して親しみの心を

約されていますが、全体としてはかえつて真に迫まるものがあります。それは、作者の感じた理想的な山水（胸中の丘壑）を描くことが根本の理念であつたことにもよりましよう。

このような伝統的な山水画も、明治以降、洋画の影響をうけ、想念的、理念的なものから写実的なものへ、俯瞰的な見方から自由な視点をもつ風景画へと変り、その対象も山水に限らず、平原や建造物など広範囲にわたつてきています。

東洋美術における自然観や自然の表現である「山水」「花鳥」という区分を西洋美術の Land scape（風景）Stille Life（静物）という語に相当させていますが、これらは、いずれも近代になつてから創られた言葉といえましよう。



速水御舟「横浜」

トピックス

●昭和五十四年度第一回美術館協議会 開く

去る六月十九日、本年度第一回の美術館協議会が開催された。

昭和五十四年度の子算並びに事業構想、県民アトリエに関する件などについて協議が交わされた。

なお、協議会委員の方々は昨年と同様である。

●第3回千葉県移動美術館 始まる

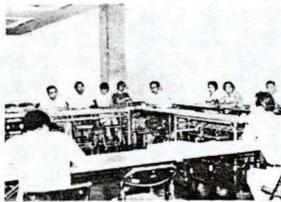


月おくれのお盆のあけた八月十六日第3回千葉県移動美術館が、成田市の成田国際文化会館でオープンした。当日は、開催に先がけ、来賓の方々はもとより地元成田市から、長谷川市長、阿波寄教育長を

はじめとした関係各位、本館から館長、副館長等の職員列席のもとにオープニング式が催され、展覧会の成功を祈った。この後、移動美術館は会場を銚子市役所市民ホールに移し、9月1日、16日まで開催される予定であり、美術をより身近なものとして御鑑賞いただきたいと思う。

●第2回美術を語る会 「風景と作家」

七月二十九日、千葉大学助教授戸田健夫氏を話題提供者に迎え開催した。展覧中の「日本の風土」展を素材にモチーフとして風景を描くこと、日本の風土と日本人の感受性に触れながら、語り合いの材料を表情豊かに提供された。



美術を語る会から

●日加友好の輪

日加国交50周年記念としての「カナタ風景画展」開催にともない、オープン日である

七月三十一日、カナダ大使館の一等書記官と、カナダのノースバンクーバーと姉妹都市の関係にある千葉市から市長の代理として高橋収入役が来館され、オープンしたばかりの展覧会を見学した。



館内をみる一行

伝言板

●展覧等の準備並びに整理のため、次の期間が臨時休館日となります。

- 10月19日(金)～10月26日(金)
 - 11月19日(月)～11月21日(水)
- 県展についての問合せは、県美術会事務局 (0477-2122127) へお願いします。

土肥刀泉氏

本名卓。昭和五十四年六月二十三日逝去。八十歳。成田市に生まれ、日展で活躍。東陶会の創立にも参与した。本県陶芸界の草分け的存在であった。県美術会常任理事

談話コーナー

美術館に思う

川瀬享子

新聞で夏期講座を知り、専門家のお話に接することができ、この良いチャンスに思いがけなく恵まれたことを感謝致します。平和で世界のあらゆる地から、絵が搬入され、観賞する機会がある現在にもか、わずらず、案外青少年は絵画に接する機会が少いように思われます。考えてみますに、営利商法に突走りこれでもか、これでもかと一方的にせまってくるテレビの影響で片寄った人間を創りつ、あるのではないかと、子育ての私は感じられるのです。病氣におかされたり突然の事故にあい苦悶の中から創作された作品が、一人の人間を形成する成長期においてどんなに、人の心を感動させているかと思う時、現在の恵まれた環境で、少しでも

その絵心の解る、豊かな、人間味のある青年が一人でも多く育つことをひそかに願っています。幸い美術館は、海岸に隣接していますので、欲を申しますと、水族館とか、海洋公園等を併せて一つの文化公園、或は文化地区といったものであれば、その方向に行けば子供共々楽しめるものがあると存じますし、またさらに魅力のある美術館となるでしょう。例えば多くは存じませんが、上野の山、京都では岡崎公園のように、絶えることなく訪れる人達の良いこの場所となつていきます。

ヒットしては廃たれ消えてゆく短命な歌謡曲と異り作品の意味やその背景等を理解することにより、受ける感動は大きく、成長期の青少年に生きる魅力をつかむ動機を与える企画を、公的な立場から、計画してくださることを、切に願っています。

